漢字の書き方の学習に重点を置いた オンライン漢字授業の実践報告

閔　　ソ　ラ

要　旨

本報告は、名古屋大学国際言語センターの2022年度春学期の「漢字Ⅱ」授業の実践報告である。この授業は初中級レベルの学生を対象に、Zoom と NUCT を利用した双方向型のオンライン形式で実施した。授業では、漢字の書き方の学習に重点を置き、タッチパネル PC と専用ペン、動くアニメ画像を使ってパワーポイントスライドの共有画面に書き方を見せながら学習させた。また、課題と中間・期末テストでは、手書きで漢字を書かせ、その写真を NUCT に提出させ、手書きで添削して返却した。さらに、毎回の小テストでは NUCT に漢字と読みを入力させることで PC での漢字の入力法も練習させ、作文と発表などの特別活動を通して、漢字を利用して 4 技能の向上を図った。本授業は学生たちにも高く評価されたが、授業中に学生たちの字を確認しながら指導することが難しく、学生たちが互いに会えないため学習意欲が低下する恐れがあるという問題点もあるため、これらに関しては改善が必要だと考えられる。

キーワード

漢字教育、書き方の学習、オンライン授業、初中級レベル、実践報告

1．はじめに

本報告は、2022年度春学期に名古屋大学国際言語センターでオンラインで実施した「漢字Ⅱ」授業の実践報告である。2020年からの新型コロナウイルスの世界的流行の影響を受け、名古屋大学国際言語センターでも2020年度春学期から2022年度春学期まで全ての授業がオンラインで実施されることになった。本報告は、その中でも、初中級レベルの留学生を対象とした「漢字Ⅱ」授業のオンラインでの実施内容とその結果を報告し、より効

果的なオンライン漢字教育の教育法を模索することを目的とする。

本報告の背景には、2020年から世界的に流行している新型コロナウイルスにより、ほとんどの授業がオンラインでの実施を余儀なくされた状況がある。このような状況下で、漢字教育においてもオンラインでの教育方法について様々な研究・実践がなされているが、まだ十分とは言えない。今後もウィズコロナ・ポストコロナ時代、さらにグローバルネットワーク時代に合わせ、オンライン授業の需要は常に存在すると考えられるため、より多くの実践報告を通して、より効果的なオンラインでの漢字の教育法の考察が求められる。また、漢字の教育法においても様々なものが存在するが、もし同じ教育法を使ったとしても、実際の授業では、授業の目標や受講者の特徴、教育環境などにより、さらに多様な形に変化して実践されると考えられる。そのため、漢字授業の実践報告を通して、様々な教育法の効果と問題点を共有し、より効果的な教育法を探っていく必要があると思われる。

特に、漢字教育において重要な教育項目の一つとして、漢字の書き方の教育があげられる。漢字の書き方の教育には、漢字の書き順の指導、「点」「はらい」「はね」などの書き方の指導、漢字を構成する点や画の位置、間隔、バランスの取り方の指導が含まれる。これらをしっかり学習しなければ、複雑な漢字を正しく書くことができず、類似した漢字の区別も難しくなるため、コミュニケーションや日常生活に支障を来たす可能性がある。そのため、漢字の授業において書き方の教育は非常に重要であると考えられるが、オンラインでの漢字の書き方の教育は決して容易ではないことが指摘されている（市川2021：51-52）。以上のことを踏まえ、本報告では、2022年度春学期に名古屋大学国際言語センターにてオンラインで実施した「漢字Ⅱ」授業の内容を報告することで、漢字の書き方の学習に重点を置いたオンライン漢字教育法の一端を紹介し、その効果及び問題点について考察する。

２．授業の概要

２．１　実施期間・利用ツール

本報告の対象である「漢字Ⅱ」は、2022年度春学期の４月15日から７月29日まで、週１回金曜日の１限（08：45～10：15の90分間）に全15回実施した。全ての授業は、90分間オンライン会議ツールである Zoom を利用した双方向型で行い、小テスト、課題、授業資料の共有には名古屋大学の e-Learning システムである NUCT（Nagoya University Collaboration and course Tools）を利用した。

２．２　受講者

2022年度春学期の「漢字Ⅱ」の受講者は22名で、中国人４名、モンゴル人２名、ウズベキスタン人２名、イギリス人２名、ブラジル人２名、韓国人１名、インド人１名、インドネシア人１名、ベトナム人１名、アフガニスタン人１名、シリア人１名、ドイツ人１名、スイス人１名、アメリカ人１名、ペルー人１名が受講していた。日本語学習期間は、４カ月から３年ほどで、日本語能力にばらつきはあったが、その多くは初中級レベルの学習者であり、重要な言葉の意味や指示文などは英語でも提示していたが、授業は大体日本語のみで実施することができた。

２．３　テキスト

「漢字Ⅱ」のテキストは、有山・落合・立原・林・山口（2013）『漢字たまご　初中級』（凡人社）を使った。このテキストは、『漢字たまご　初級』で162字を勉強していることを前提にしており、そこでさらにこのテキストで164字を学習することで、日本語能力試験Ｎ５とＮ４レベルの漢字を身につけられるようになっている。第１課から第15課までの各課は、最初にウォーミングアップとして、その課で勉強する漢字が入っているイラストや文章が提示されており、その後、漢字を10～12字ほど書きながら勉強し、その漢字の読み書きや意味に関する問題がある練習１と、日常生活の中で遭遇しそうな場面を提示し、学習した漢字を利用して問題を解く練習

２で構成されている。本授業では、練習１を除いた各課の全体を授業中に取り上げ、練習１は課題とした。

『漢字たまご　初中級』は、各課において、アルバイト募集への応募、ショッピング、旅行、進路探索、イベントへの申し込み、引っ越しなど、日常生活の場面をテーマとし、その場面でよく使われる漢字と表現を学習できるようになっており、ウォーミングアップや練習問題も日常生活に直結していて、学習することですぐに実生活に応用できるようになっているのが特徴である。また、読み方と書き方を学習する164字の漢字に加え、各課のテーマに合わせて、読めればいい漢字語（各課約３語、全48語）と、見て意味が分かればいい漢字語（各課約２語、全27語）も紹介していて、日常生活においてよく目にする漢字を効率よく覚えられるようになっている。そのため、このテキストは日本で暮らしながら毎日漢字を読み、使わなければならない留学生には非常に有用なテキストであると考えられる。

２．４　授業の流れ

本授業では、全15回の授業の中で、２回は中間テストと期末テストを実施し、残りの13回の授業は、１回に一つの課を学習する形で進めた。授業の流れは以下の通りである。

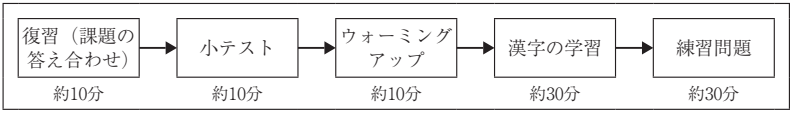

図１　授業の流れ

授業の始めには、前回の課題だった教科書のページを共有し、復習を兼ねて答え合わせをし、NUCT の「小テスト」で事前に用意しておいた小テストを実施した。小テストの終了後は、画面を共有し、答え合わせをした。それから、その日学習する課のウォーミングアップのページを画面共有し、学習する内容を確認し、漢字（10～12字）の書き方と読み方、意味を紹介した。漢字の学習が終わったら、テキストの練習２の問題を見なが

ら一緒に解き、説明を加えた。授業の後は、毎回課題を出し、翌週の水曜日までに NUCT に提出させた。

3．オンライン漢字授業の実践方法

3．1　漢字の学習方法

3．1．1　漢字の書き方の学習

第１章でも述べたように、漢字学習においては、漢字の読み方や意味を覚えることも大事であるが、それと同時に書き方を覚え、正確な形を覚えさせることも非常に重要である。というのは、漢字には類似した字が多く、点や画一つ一つを正確に覚えなければならないからである。また、書き順に沿って、「点」「横画」「縦画」「はね」「はらい」などの漢字を構成する各部分をバランスよく正確な形で書かないと、正しく読んでもらえなくなり、学習時だけでなく、日常生活においても問題が生じる可能性がある。パソコンやスマートフォンなどのデジタル機器の発達により、漢字を書く機会が著しく少なくなった現在も、漢字を書く機会が全くないわけではなく、類似した複雑な漢字を正確に区別するためにも、漢字の書き方の学習は依然として重要であると言える。対面形式の漢字の授業では、学生たちに漢字の書き方を直接見せ、学生たちが書いている字、または書いた字を直接確認し、その場で見本を見せて直すことができる。しかし、オンライン形式の授業では、対面授業のように直接見せたり確認することが困難であるため、様々な工夫が必要となる。

市川（2021）では、非漢字圏出身の学生を対象とした初級漢字科目のオンラインでの実践方法を報告している。第１章にも言及したように、市川（2021：51-52）では、非漢字圏出身学生の場合、漢字の書き方の理解・習得に大きな労力がかかり、教員も直接書き方を確認したり添削するなど、細やかな指導をする必要があるが、カメラ越し、マイク越しで指導するオンライン授業では、書き方の身体的な技法を直接見せることができないため、情報量が少なく、漢字の書き方の指導が容易ではないことを指摘している。市川（2021）の実践報告によると、最初は教員が Ａ４サイズの小さ

いホワイトボードに字を書いてカメラ越しに見せ、学生にはノートなどに書いた字を同じくカメラ越しに見せてもらい、チェックしていたが、小さいホワイトボードには漢字をたくさん書いて見せることができず、学生たちの字に対しても添削することができないという問題があったと言う。このような問題の改善策として、ペンタブレットを導入して書き方を見せ、学生たちの字は宿題用紙を画像で提出させ、教員が直接添削できるようになったが、タブレットの画面と教材の画面を同時に共有できないという問題点が残ったと述べられている。

本授業では、以上の市川（2021）の実践内容と問題点を踏まえ、漢字の書き方の学習においては次のような方法を使った。まず、漢字一つに対し、パワーポイントスライド１枚を用意し、そこにその漢字の書き方がよくわかるように、漢字検索サイト（注１）の動くアニメ画像を載せ、何回も書き順と書き方が確認できるようにした。それと同時に、教師がタッチパネルノートパソコンでそのパワーポイントの画面を共有しながら、そこに直接漢字を書いて見せ、書き順の番号を付け、教科書には載っていない画の書く方向も矢印で示した。また、「はね」「はらい」「点」など、書くとき注意が必要な部分には印をつけたり、繰り返して書いたりして強調した。さらに、似ている他の漢字や漢字のパーツとの比較を通して正確な形を覚えさせた。（図２を参照）

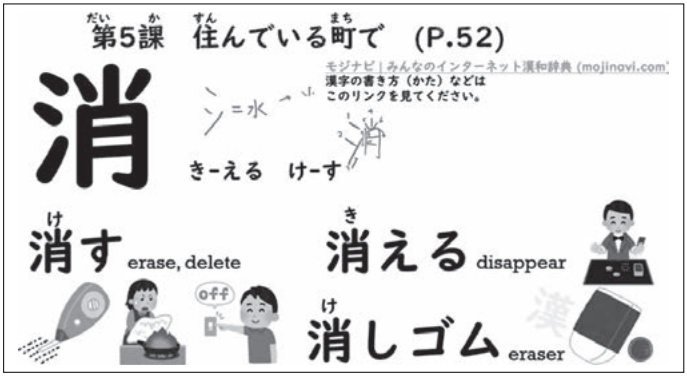

図２　漢字学習のパワーポイントスライドの例

ペンタブレットやペンが付いているタッチパネルノートパソコンの場合、Microsoft Office のパワーポイントやワードでは、専用ペンを画面に近づけることで「インク」タブが活性化され、文書上にペンで自由に文字や線を書いたり消したりできるようになっているため、漢字の書き方を教える際は非常に便利である。このようなペンを使うと、パワーポイントのスライドショーの際にも「ペン」の項目を選択し、マウスよりはるかに繊細な操作で漢字の書き方を簡単かつ正確に見せることができるようになる。また、テキストのページもスキャンしたり写真を撮ったりして、同じパワーポイントスライドに載せ、授業中は一つのスライドをずっと見せることで、共有画面を何回も変更して授業の流れが途切れたり、学生たちの集中力を低下させることがないようにした。このように、教材をパワーポイントスライド一つにまとめ、タッチパネルと専用ペンを利用することで、市川（2021）で指摘された、PC の教材の画面と、ペンタブレットの画面を切り替える手間が省け、より効率的に書き方を教えることが可能となった。さらに、授業で使うパワーポイント資料では、学生たちが真似して書くことができるよう、できるだけ手書きの文字に近い形のフォントを使った。

毎回授業が終わった後は、NUCT の「リソース」にその日使ったパワーポイントスライドの中から、テキストの絵や、書き順のアニメ画像など、著作権に関わる項目を削除したものをアップロードして、学生たちが自由に復習に利用できるようにした。その際、パワーポイントスライドには、授業中に教師がペンで書いた漢字の書き順の絵は残し、参照できるテキストのページ番号や、アニメ画像を探して確認できるように漢字検索サイトの URL を載せた。

また、授業中の学生たちの字の確認及び添削においては、学生たちに教科書の練習用マスの中、またはノートに字を書かせ、カメラにそれを映してもらい、確認した。しかし、カメラ越しに一人ずつ書き方の確認と添削をすることは容易ではなく、人数も22名と多かったため、Zoom の画面も小さく、一人ずつ指導できるような時間的な余裕もなかった。このような

理由から、授業中に学生たちの字の確認と指導が十分にできなかったため、課題は手書きで書いたものの写真を撮って画像で提出してもらい、添削して返した。（課題については、3.2節で詳述）

3．1．2　漢字の読み方と意味の学習

本授業では、オンラインでの漢字の書き方の学習に重点を置いていたが、同じく重要な学習項目である漢字の読み方と意味の学習もしっかりできるように工夫した。オンライン授業では、教師が直接黒板やホワイトボードに板書しても、学生側からはカメラ越しでそれを見ても読みにくいことが多いため、普通はパワーポイントを利用し、画面共有でそれを見せながら授業を行う。このパワーポイントのような画面共有用の授業資料は、学生の手元にある教科書やプリントのみを使うより、学習内容を効果的に示すことができるという点で重要な役割を果たす。しかし、あまり情報量が多くても読みづらくて分かりにくくなるため、本授業では文字よりもイラスト（注２）を多めに使い、視覚的に分かりやすくすると同時に、初中級レベルの学生たちを配慮し、英語の意味を簡単に入れた資料を作った（図２を参照）。また、資料にはテキストに重要語として提示されている言葉を載せ、漢字だけでなく、よく使われる言葉も一緒に学習し、その言葉の中でどのような意味を表しているかも理解できるように心がけた。さらに、漢字の読み方は、教師の発音をリピートさせたり、英語の意味を提示して、日本語で答えさせたりして口慣らしをした。「授業」「住所」のように、長音と長音ではないところが含まれている言葉など、発音に注意する必要がある場合は、何回も発音の練習をして、読み方を正確に覚えるようにした。

3．2　課題

課題は、毎週学習した課の「練習１」の問題に手書きで答えを書かせて、その写真を NUCT に提出させた。提出された課題は、教師がタッチパネルパソコンを使って手書きで添削をして返却し、学生が間違えたとこ

ろをチェックできるようにした。これは、本授業が漢字の書き方の学習に重点を置いていたためであり、市川（2021）の指摘のように、授業中には受講生の人数が多く、カメラ越しではどうしても学生たちの書いた字を確認することができなかったため、学生たちの書いた字をしっかりチェックし、間違いを訂正するための方策だった。各課の「練習１」を課題にしたのは、「練習１」には漢字を構成するパーツを使って漢字を完成させる問題や、ひらがなを漢字に変えたり、漢字の読みをひらがなで書かせる問題などがあり、学生たちの書いた字や学習の成果を把握しやすかったためである。提出物にはワードや PDF など様々な形態があったが、学生が自由に選択できるようにした。添削は図３のように、教師もタッチパネルパソコンを使って間違ったところや、もう少し正確に書く必要がある漢字に赤色の下線で印をつけて、手書きで訂正した。（注３）

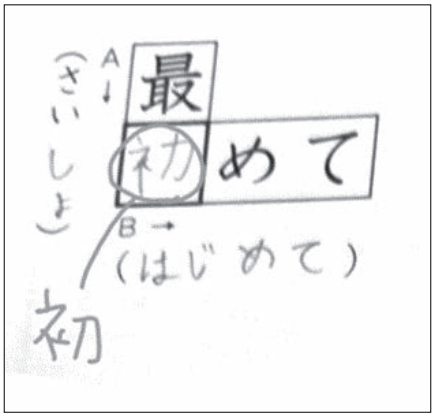

図３　課題の添削の例（『漢字たまご　初中級』p.122　問題Ⅰ）

３．３　テストの実施

本授業は、漢字の書き方の学習に力を入れて実施したため、中間テストと期末テストの２回のテストでは、学生が漢字を正確に書けるかどうか確認できるように、手書き形式で実施した。テストでは、PDF のテスト問題を共有し、学生がそれを見ながら手元のノートや紙に答えを手書きで書

き、時間内にその答案用紙の写真を NUCT に提出するようにした。テスト終了後、提出された答案のファイルは全て教師がダウンロードし、課題と同様、タッチパネルパソコンと専用ペンを利用して赤色の手書きで添削して NUCT から返却し、学生が結果を確認できるようにした（図 4 を参照）。

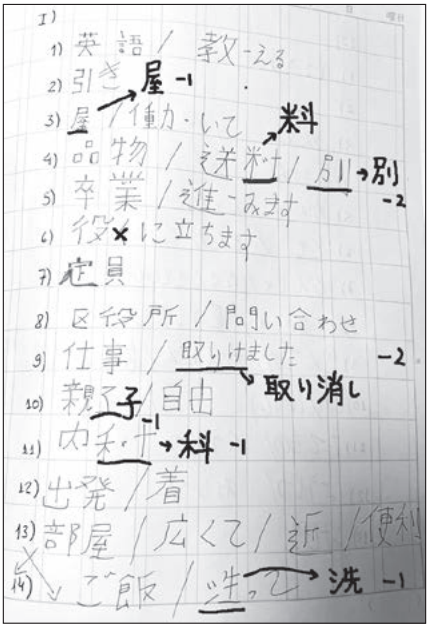

図 4　テストの答案の添削の例（漢字を覚えて書く問題）

テストの問題は、文の中でひらがなになっている下線部を漢字に変えて書く問題と漢字の読み方を書く問題に、テキストで一緒に学習した問題や特別活動（3.5節を参照）で取り扱った漢字の看板の写真を提示し、写真から分かる内容を記述させる問題を加えて実施した。

3．4　小テストの実施

本授業では、上述したように、学生たちが毎回学習した漢字をしっかり

覚えているかどうかをチェックし、それと同時に学習の動機を与える目的で、毎回の授業で前回学習した漢字の小テストを実施した。対面形式の授業では、紙に手書きで漢字やひらがなを書いてもらうことができるが、本授業はオンライン形式だったため、NUCT の「小テスト」機能を利用し、小テストを実施した。また、最近は手で漢字を書く機会より、スマートフォンやパソコンで漢字を入力する機会のほうがはるかに多いため、学習した漢字を正確に入力できるように練習させることも、NUCT を通した小テストの実施の狙いの一つだった。なお、受講者数が多いため、毎回の学習の成果を手軽に確認するためにも、このようなツールの利用は効果的だと考える。

小テストは、大きく４つのタイプの問題から構成されている。１つ目は、漢字を見てその読みを選ぶ問題（図５）、２つ目は、漢字を見てその読みを入力する問題（図６）、３つ目は、意味を見て漢字を選ぶ問題（図７）、４つ目は、意味を見て漢字を入力する問題（図８）だった。学生たちは、小テストの答えを提出すると、その場で自分の点数と間違った問題を確認できるようになっていて、全員の提出が終わったら、一人ずつ指名して問題に答えさせながら答え合わせをした。

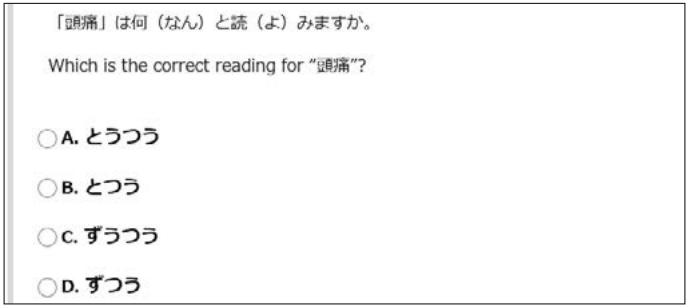

図５　読みを選ぶ問題の例

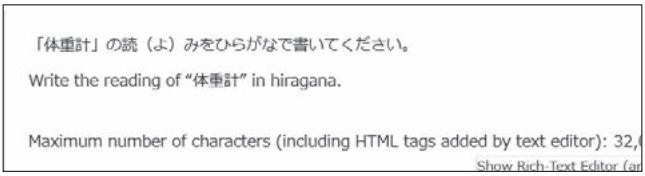

図６　読みを書く問題の例

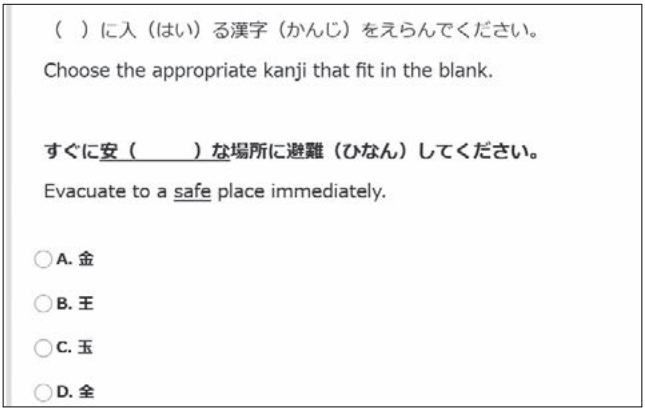

図７　漢字を選ぶ問題の例

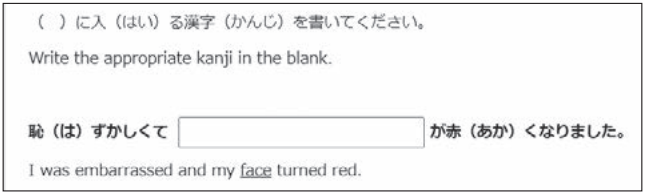

図８　漢字を書く問題の例

上記の理由から、小テストではあえて手書きで漢字の書き方の学習成果を測る問題は出さなかったが、図７のような漢字を選ぶタイプの問題では、形が似ている漢字を選択肢に入れ、漢字の形を正確に区別することができるかどうかを確認した。

3．5　特別活動

本授業では、ただ単に漢字の読み書きを学習し、それを利用して問題に簡単に答えることだけにとどまらず、漢字を使ってある程度長い文章を書かせたり、実生活の中で学習した漢字を見つけて紹介したりする活動も実施した。課題として出した問題の中で、絵を見てそれを描写させたり、自分のことについて書かせたりする作文の問題があり、学生たちが手書きで出した答案を添削し、その内容をみんなで共有する活動を５回実施した（図９を参照）。

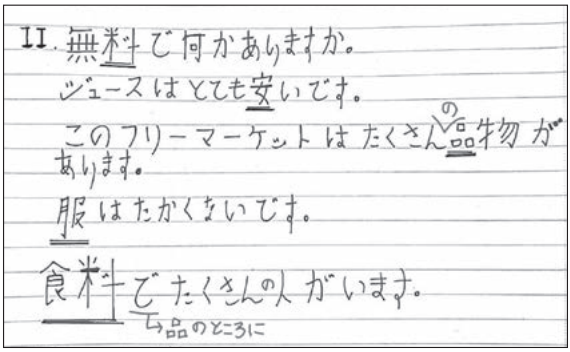

図９　作文活動の例

また、第11課は、地域の中の案内、看板の中の漢字を学習する内容で、第11課の練習２の最後に「町の中で気になった看板の写真を撮って、みんなに紹介しましょう」という問題があった。これを課題とし、周りで撮った看板の写真とその簡単な説明文を提出してもらい、みんなの前で簡単に発表し、看板の意味を紹介させた（図10を参照）。

図10　周りの看板の写真と説明の発表時の PPT 画面

4．実践の結果

4．1　漢字授業のオンライン実施の効果

授業実施前は、市川（2021）で指摘されたように、書き方の学習が重要である漢字の授業をオンラインで実施することについて心配もあったが、実際実施してみると、オンラインならではの様々な効果もあったと思われる。上記したように、本授業では書き方の学習に重点を置いて、漢字の書き順、「点」「はね」「はらい」などの正確な書き方、漢字を構成する各パーツの位置やバランスの取り方をタッチパネルパソコンと動くアニメ画像を使って指導した。その学習の効果を課題とテストの手書きの問題を通して確認した結果、課題においても書き方の間違いはそれほど多くなく、漢字を覚えて書くテスト問題においても、中間テストでは44点満点に平均36.02点、期末テストでは30点満点に平均24.85点を獲得しており、漢字が正確に書かれた答案は80％を上回り、オンラインでの漢字の書き方の学習も効果があると言える。その理由としては、オンライン授業では学生たちが目の前のパソコンの画面全体の大きさで漢字の書き方をしっかり見て学ぶことができることが考えられる。大きい画面を見ながら自分のテキストやノートに手書きの練習をして、授業中はカメラ越しで、授業後は課題を通して手書きの漢字を教師にチェックしてもらうことができるため、漢字

の書き方を身につけることができたと考えられる。もちろん課題やテストのときに学生たちが書いた字を見れば、全員が全ての漢字を完璧に身に付けたとは言えないところもあるが、それは対面授業でも同じく起こり得ることだと考えられる。このように本授業を通して、授業中は漢字の書き方をタッチパネルパソコンと動くアニメ画像を使って指導し、授業後は手書きで書いた課題の写真を提出させ、それを手書きで添削して返すことで、学生たちが漢字の書き方を身につけたかどうかをチェックし、フィードバックすることがオンライン授業でも十分に可能であるということが確認できた。

次に、NUCT の「小テスト」機能を利用した毎回の小テストに答えることで、学生たちはデジタル機器で漢字を入力する練習をすることができ、実生活でパソコンでレポートや論文作成時にも役に立ったと思われる。パソコンやスマートフォンから漢字の読み方を正しく入力して適切な漢字に変換することは、今の時代に必須不可欠な能力であり、漢字の授業では、そのような教育も合わせて実施する必要があるのではないかと考える。また、小テストで毎回漢字を入力することで、毎回学んだ漢字を入力する練習ができると同時に、その結果もすぐに確認できる。そのため、このようなデジタルツールを使って小テストを実施することは、学生たちの漢字の使用能力の向上に効果があると考えられ、オンライン授業だけでなく、対面形式の授業でも、学生たちのノートパソコンやスマートフォンを利用し、NUCT のような e-learning 用の学習ツールを使って小テストを実施するといいと考える。さらに、教師側においても、特に大人数クラスの場合は、毎回の小テストを手書きで実施すると、学生たちの手書きの漢字を毎回チェックして返却することは骨が折れる作業になる。それを NUCT の「小テスト」のようなツールを利用して実施すると、自動的に採点され、学生の答案の提出とほぼ同時に点数を確認することができ、手間を省くことができる。また、紙を使わないためペーパーレス化にも貢献できる点、正解率が低い問題もすぐに確認できるため、正確なフィードバックができる点も長所としてあげられる。

最後に、本授業では特別活動を実施し、学生たちがただ単に漢字の読み書きを学習して終わるのではなく、学習した漢字を使って作文して発表したり、実生活の中で見つけた漢字を紹介したりすることで作文と発表の機会を与えた。発表のとき、他の学生たちは発表している学生の作文を読みながら、発表を聞いているので、特別活動を通して、漢字を利用した読む・書く・聞く・話す能力の向上にもつながったと考えられる。普通の授業中もできるだけ質問を投げ、みんなにまたは指名して一人一人に答えさせてはいたが、やはり学生たちは受動的に質問に答えるときよりも、特別活動の発表のときにより楽しそうに参加していた。オンライン授業では、学生たちが一人ずつ孤立し、他の学生と交流する機会がなかなかないため、このような活動を通して、互いの話を聞き、話し合う機会を作るのは大事だと考える。

4．2　本授業に対する受講生の反応

本節では、2022年度春学期終了後、最後の授業で実施した学生アンケートの結果に基づき、本授業の効果と問題点について考察する。アンケートでは、受講生22名のうち20名がNUCTを通して匿名で答えてくれた。この学生アンケートは、今後の授業の改善を目的に、12の質問を通して、学生の満足度やよかった点、改善が必要な点などを調べるものであるため、漢字の書き方の学習に重点を置いたオンライン漢字授業の効果について直接的に聞いて、答えてもらったわけではないが、アンケートの中で本授業の効果と問題点にかかわる部分をまとめ、取り上げたいと考える。

まず、授業の満足度を聞く問題における学生たちの意見（注4）には、「先生のスライドにテキストの内容がよく説明されていた」「活動、課題などで漢字をよく理解し、覚えられた」「すでに知っている漢字もあったが、たくさんの新しい漢字が勉強できた。漢字の意味と書き順がよく説明されていた」「課題は漢字を覚えるためのいい練習になった」「（授業中の活動は）テキストの漢字を実際の場面で使うための良い活動だった」「パワーポイントがとても役に立った」などの意見があり、オンライン授業でも、パワー

ポイント資料と課題、活動を通して効果的に漢字を学習することができたと考えられる。一方、授業で困ったことを聞く問題では、「課題が多い」「集中しにくい」「グループワークの時間がなかった」「文字を書くことに焦点を当てたクラスは、オンラインで行うにはあまり適していない」という意見がそれぞれ１名ずつおり、授業の実施方法にもう少し改善する余地があったように思われる。

次に、本授業で使った教材や実施方法で、これからも続けたほうが良いと思うところに関する質問には、「新しい単語をしっかり勉強し、一緒に練習する」「漢字の穴あけと読みの練習がとても役に立った。毎週の小テストもいい練習だと思う」「全ての漢字をパワーポイントに説明し、書き順を見せてくれたのはとても有用だった。宿題もよかったし、毎週の小テストも勉強したことをチェックできてよかった」「漢字の正しい書き方を見せるような教え方はとても役に立った」などの意見があった。簡単にまとめると、小テストがよかったという人が４名、パワーポイントスライドがよかったという人が２名、書き順の説明がよかったという人が２名、課題がよかったという人が２名、テキストがよかったという人が１名おり、今後もこれらの方法を使っていきたいと考えた。一方、本授業において改善が必要だと思うところに関する質問には、「内容は今で十分だ」「今の教育方法を続ければいい」「なし」と答えた人が６名おり、何も答えていない人が10名いたことから、現在の教材や実施方法に満足している人が多かったと思われる。しかし、「漢字の書く練習」「宿題を少し減らしてくれたらもっと楽しく勉強できると思う」「オンライン授業でなければよかった」という意見もあり、やはり漢字を書く練習、宿題の量にも改善の余地があることが分かった。

最後に、本授業に対するアドバイスや意見を聞く問題では、「同じ教科書シリーズを使った漢字の授業がもっと増えたらいいのにと思う」「オンライン授業でなければよかった」「とてもいいコース。でも、可能であれば、仮想講義の代わりに対面授業で」「クラスは本当に素晴らしく、教え方が好きだった。いくつかの活動ではブレークアウトルームでほかの学生と一

緒に知り合うことができればもっとよかったと思う。でも、それ以外は素晴らしかったし、多くのことを学んだ」という意見もあった。

学生アンケートの結果から、多くの学生が本授業の教材（テキスト、パワーポイントスライド）と実施方法（小テスト、書き順の説明、課題）に満足していたことがわかったが、グループワークを通した学生間の交流の機会の増進、課題の量の調整、漢字を書く練習活動の取り入れなどについて改善が必要だということもわかった。

4．3　問題点と改善策

本節では、これまでの報告を踏まえ、本授業における問題点とその改善策について考察する。

まず、市川（2021）ですでに指摘されているように、オンラインの授業では、授業中に直接学生の書いた字を確認し、その場で直せるように細かく指導することが難しいという問題点がある。教師がタッチパネルパソコンとペンを使って書き方を教え、課題の写真で学生が書いた字を添削することはできるが、授業中はカメラ越しで学生が書いた漢字の細かい画までリアルタイムでチェックし、指導することはなかなか困難であり、対面形式の授業で直接学生たちが書いている字を目で一つ一つ確認し、その場で正しい書き方を教えるよりいい効果を期待することは難しい。しかし、市川（2021）でその改善策としてあげられているように、学生側にもペンタブレットが備わっていれば、授業中も学生が漢字を書いている様子が明確に確認でき、その場で適切な指導をすることができると思われる。ただし、そうするには施設・環境や費用の問題が生じるため、様々な面から慎重に検討が必要となると思われる。より簡単で現実的な方法としては、Zoom画面をスピーカービューにすることで学生の画面を大きく調整し、カメラ越しで書いた文字を確認して指導したり、今書いた字の写真を Zoom のチャットを通して送ってもらって画面共有を使ってその場ですぐに添削しながら指導する方法も考えられる。

次に、学生アンケートに見られるように、オンライン授業によりクラス

メートと交流することができない点は、学生たちに寂しい思いをさせたり、学生一人一人を孤立させ、学習意欲を低下させる恐れがある。本授業では、特別活動として発表する時間があり、そこで他の学生の話を聞くことはできたが、グループワークは実施しておらず、学生たちがより活発に意見を交わしたり、話し合う機会が十分ではなかったと思われる。これは、学生の意見にもあったように、特別活動としてグループワークも取り入れ、グループで解決するタスクを通して漢字の学習・復習を促す活動を取り入れるといいと考える。特に、特別活動の中で、学生が周りの漢字の看板の写真を撮って発表する活動を、写真を見せて簡単に意味を紹介する程度の発表にとどまらず、次の竹山（2021）のような活動が望ましいと考える。竹山（2021）では、１回目の授業で教師が日常生活の場面を設定し、その場面で見ることができる漢字と語彙、その読み方などを説明する。その後、学生は宿題として同じ場面で見ることができる漢字を調べて発表の準備をし、次の授業で写真とともに発表し、全員で話し合う。本授業は、毎回学生の発表を中心に進めることはできないが、１回ほどは授業全体を特別活動として発表に当て、発表後、それと関連して自国の文化と比較して話し合ったり、同じ場面で見ることができる新しい漢字と漢字語を追加で紹介することはできると考えられる。竹山（2021）に述べられているように、このように学生たちが自分の周りから漢字を見つけて発表する活動は、毎日の生活の中で学生たちが漢字の必要性を実感することができ、学習意欲を高める効果があり、学生たちが日本に来ていない状況のオンライン授業でもインターネットを利用して十分実施することができるため、オンラインの漢字授業でも積極的に取り入れるといいと考える。

最後に、本授業では、漢字の書き方の学習に重点を置き、書き順や漢字の構成要素の書き方、位置、バランスの取り方を正確に指導しようとしたにもかかわらず、テストでは書き順や漢字の構成要素の位置・バランスに関して問う問題を出していなかったということも問題点として挙げられる。漢字を覚えて手書きで書かせる問題はあったが、それだけでは漢字の書き方の学習が十分にできたかを測るには十分ではない。そのため、今後

は漢字の書き方と漢字の構成要素の位置やバランスに関して問う問題も出題し、学生たちが授業を通して漢字の書き方をしっかり身に着けたかどうかを測る必要があると考える。

5．おわりに

本報告では、2022年度春学期に名古屋大学国際言語センターにて実施された初中級レベルの留学生を対象とした「漢字Ⅱ」授業のオンラインでの実施内容について報告し、その効果と問題点及び改善策について考察した。本授業では、90分間 Zoom を利用した双方向授業を実施し、名古屋大学の e-learning システムである NUCT を利用し、オンラインで授業を実施した。授業では特に、漢字の書き方の学習に重点を置いて、タッチパネルパソコンと専用ペンを使ってパワーポイントスライドの共有画面に教師が漢字を書きながら「はね」「はらい」などの書き方と、漢字の構成部分の正確な位置やバランスの取り方を教え、動くアニメ画像を利用して何回も書き順を確認させることで、オンライン上でも漢字の書き方を効果的に教えることができることを示した。また、毎回の課題と中間・期末テストにおいては、手書きで書いた漢字の写真を提出させ、細かく添削して返すことで、オンラインでも学生たちの書き方を確認し、指導することができた。さらに、毎回の小テストは NUCT を利用し、漢字と読み方を入力する形にすることで、学生たちが手書きだけでなく、デジタル機器を利用して漢字を入力することも学べるようにし、同時に教師側の添削の負担も軽減することができた。最後に、特別活動として作文と日常生活で撮った漢字の看板の写真を発表する機会を設け、一方的に漢字を教えるだけでなく、学生たちが学んだ漢字を利用して書く・読む・話す・聞くことができる機会を与えた。

以上のように本授業は、オンラインでも書き方の学習に重点を置いた漢字教育が十分に効果的であることを示し、学生たちの満足度も高いことがわかった。しかし、その一方、①オンラインでは授業中に学生たちが書いている様子を確認し、その場ですぐに指導することが難しい点、②学生同

士が直接会うことができず、孤立し、学習意欲を低下させる可能性がある点、③テストにおいて、漢字の書き方の学習成果を十分に図ることができなかった点は問題点として指摘できる。①の問題点は、学生側もペンタブレットのようなツールを利用する方法や、授業中 Zoom 画面の大きさを調整したり、Zoom のチャットを利用して写真を送ってもらったりすることで学生たちが書いた字をすぐに確認して指導する方法が考えられる。また、②の問題点は、グループワークを設けたり、発表と話し合いの時間を充実させる方法で改善できると思われ、問題点③も、漢字の書き順や漢字の構成要素の位置・バランスを問う問題を出題することで改善できると考える。今後はこのような改善策を授業で実践してその効果を検証し、より効果的なオンライン漢字授業を目指したいと考える。

注

1）授業で利用した漢字検察サイトは「漢字検索－漢字の正しい書き順（筆順）（kakijun.jp）」と「モジナビ｜みんなのインターネット漢和辞典（mojinavi.com）」だった。著作権保護のため、本報告では、書き方のアニメ画像を削除し、漢字検察サイトを紹介しているパワーポイント資料の一部（授業の後に学生たちに提供したパワーポイント資料の一部）を載せることにする。

2）パワーポイント資料に使ったイラストは、無料イラストサイトの「かわいいフリー素材集　いらすとや（irasutoya.com）」のものを利用した。

3）本報告に載っている学生の課題やテストの写真は、学生本人の許可を得て使用した。

4）学生たちの意見はほとんどが英語で書かれていたが、本報告では筆者による和訳を載せることにする。

参考文献

有山優樹・落合知春・立原雅子・林英子・山口知才子（2013）『漢字たまご　初中級』、凡人社

市川明美（2021）「非漢字圏出身者を対象とする初級漢字科目のオンライン授業実践報告」『日本語・国際教育研究紀要』24、pp.50-60、北海道大学高等教育推

進機構国際教育研究部
竹山直子（2021）「【JLP プログラム実践報告】「日常生活の漢字」を学ぶ：初級修了者を対象としたオンラインの漢字復習クラスから」『多文化社会と言語教育』1巻、pp.59-62、法政大学グローバル教育センター日本語教育プログラム